今川仮名目録 ～スライド本文・補足説明～

◎スライド1

はじめに、駿河の戦国大名として成長した今川氏について簡単に説明する。

1. 今川氏の出自

今川氏は源氏の流れをくむ足利氏一族であり、鎌倉時代に吉良の荘に移り住み、吉良家を起こした吉良長氏の子の国氏が、近くの今川の地（愛知県西尾市）に分家したことから始まる。したがって今川氏の初代は国氏だが、子の基氏を経て孫の範国の時代に遠江・駿河の守護となった。そのため、この範国を守護大名今川氏の初代とするのが一般的である。

2. 今川氏歴代当主（棟梁）略歴

・初代範国と2代範氏時代

中先代の乱、箱根竹の下の戦いで兄たちは討死、5男範国が家督を相続する。美濃青野原の戦いで軍功あり、遠江・駿河の守護となる。

・3代泰範とその叔父貞世（了俊）時代

貞世は今川氏きっての英才で、九州探題に抜擢されると九州全土を制圧、室町幕府の基礎を築く活躍を見せた。貞世の父範国は貞世に家督を継がせようとするが、貞世はこれを辞して兄である2代範氏の次男泰範に家督を継がせる。貞世は応永の乱に連座して失脚後、「難太平記」等の作品を生み出すなど文人としても著名である。

・4代範政と5代範忠時代

鎌倉公方・足利持氏を幕命により攻めて自殺に追い込む。さらに遺児たちの反乱である「結城合戦」に勝利するなど、戦いに明け暮れる日々を送った。またこの頃、安倍川対岸の安倍城に籠って圧力をかけていた狩野氏を滅ぼし、支配強化に成功した。

・6代義忠と7代氏親時代

応仁の乱に乗じて、遠江奪回を目指した6代義忠は勝間田氏を滅ぼすが、その残党勢力と戦って敗死する。その後、後継者問題で紛糾するも氏親が7代当主となった（叔父である北条早雲の後押しあり）。妻の寿桂尼とともに今川氏の黄金時代を現出し、守護大名から戦国大名へと成長を遂げる。

・8代氏輝、弟彦五郎、天文5(1536)年3月17日怪死（暗殺説あり）

・9代義元と10代氏真時代

氏親は5男義元の教育を太原雪斎に託す。8代氏輝、義元兄の彦五郎が怪死し、後継者として義元が擁立された。これに抵抗したのが異腹の兄・玄広げんこうえたん恵探で、

これを花蔵の乱に破り、義元は9代目当主となる。その後、義元は桶狭間で織田信長に討たれ、10代氏真も徳川家康により小田原へ放逐され、今川氏は滅亡した。

◎スライド2

戦国大名の分国支配

1. 分国法の制定：領国支配の基本法、家臣団統制等を規定
幕府法、守護法、国人一揆の規約等からなり、中世法の集大成的性格を持つ
 - ・ 寄親寄子制、喧嘩両成敗法など戦国大名の新しい性格を示す
 - ・ 城下町の集住「朝倉孝景条々」、喧嘩両成敗「甲州法度之次第」
 - ・ 婚姻の許可制「今川仮名目録」、年貢未納入の禁止「塵芥集」
2. 検地：農民の耕作する土地面積や年貢量を検地帳に登録し、戦国大名が直接農村を支配

さしだし

指出：戦国大名が、領国の土地面積や収穫高などを領民にレポート提出させる

3. 経済政策：絶え間のない戦国時代を戦い、生き抜くための富国強兵の基本
 - ・ 城下町の建設：家臣団を集住させ、領国経営の拠点とする
 - ・ 宿駅、伝馬の交通制度を整備、関所の廃止、市場の開設
 - ・ 有力商工業者の統制、大河川の治水・灌漑事業、*鉦山開発
 - * 金山：甲斐黒川・駿河安倍 銀山：石見大森・但馬生野
 - ・ 木綿の需要増大 三河地方で栽培が盛んとなり、衣料革命（麻から木綿へ）起こる

◎スライド3

1. 分国法の制定＝「今川仮名目録」
今川氏親が制定し、今川義元が追加する
領国支配の基本法、家臣団統制等を規定する
第8条 喧嘩両成敗を規定 ⇒ 喧嘩した者は両名ともに死罪
第30条 他国との婚姻の禁止
2. 検地
農民の耕作する土地面積・年貢量を検地帳に登録し、直接農村を支配
今川仮名目録 第1条
名田の没収禁止と年貢増を条件とする名田の競望
3. 経済政策
城下町建設（駿河府中）、宿駅・伝馬制、関所廃止、市場の開設

有力商工業者統制、大河川治水・灌漑工事、 鉾山開発（安倍金山）
など富国強兵の基礎とする。

◎スライド4

第6代今川家当主 今川義忠木像（菊川市 正林寺所蔵）

駿河国守護。童名竜王丸。上総介。永享8(1436)年3月範忠の子として生まれ、寛正2(1461)年3月10日、家督を相続する。寛正4(1463)年幕府より古河公方足利成氏討伐を命ぜられたが動かず、寛正6(1465)年6月遠江への侵略を開始した。応仁の乱が起ると、文明元(1469)年兵を率いて上洛し、遠江守護しほよしかと斯波義廉との対抗上東軍に属した。文明8(1476)年2月、遠江の豪族勝間田・横地氏らを討伐するも、帰途同月9日、塩見坂で敵の残党に夜襲され流れ矢にあたり討ち死にした。享年41歳。義忠は武勇に優れるとともに、連歌・和歌をたしなみ、連歌師宗長は若いころ義忠に近侍していた。

◎スライド5

第7代今川家当主 今川氏親木像（静岡市 増善寺所蔵）

童名竜王丸。上総介、のち修理大夫。文明5(1473)年義忠の子として生まれる。文明8(1476)年義忠の不慮の死により家督相続の内紛が起きたが、母北川殿の兄である伊勢新九郎（北条早雲）の働きにより当主となる。文明11(1479)年12月21日には幕府より家督相続を認められた。

氏親は、叔父伊勢新九郎の援助を得て、明応3(1494)年遠江への侵入を開始し、文亀元(1501)年には、遠江守護斯波氏、信濃守護小笠原氏の連合軍を破り、信濃・三河の国境まで勢力を伸ばした。永正元(1504)年には新九郎を助け関東に出兵したが、翌永正2(1505)年から永正5(1508)年にかけて三河に侵入し、松平長親をおさえて、永正7(1510)年7月遠江守護に任ぜられた。

大永4(1524)年には、すでに遠江で検地を行っており、大永6(1526)年には仮名目録を制定している。永正の末年から大永にかけて、守護から戦国大名への転化をとげていたと考えられる。大永6(1526)年6月23日中風を煩って病死。享年54歳。

◎スライド6

今川氏親正妻 寿桂尼画像（菊川市 正林寺所蔵）

寿桂尼は、京都の公家、中御門宣胤ななかみかどのぶたねの娘として生まれた。永正 2(1505)年ころ今川氏親と結婚した(永正 5 年説あり)。今川氏は代々京都への憧憬の念が強く、寿桂尼と氏親の結婚によって、今川氏と京都の公家との文化交流が頻繁となった。

2 人の間には永正 10(1513)年長男氏輝、同 16(1519)年に 5 男義元が生まれている。氏親が駿河・遠江の戦国大名となって安定した矢先、夫は中風で倒れた。寿桂尼は寝たきりとなった夫の補佐をしながら、政治的手腕を身につけていった。氏親は 56 歳で死亡したが、この時長男氏輝は 14 歳であり、8 代目当主となったが、実質的な今川権力を継承していたのは寿桂尼であった。

寿桂尼は氏親の許へ嫁ぐ時、父中御門宣胤から「歸」とつぐの印判を受け取った。氏親死後の約 3 ヶ月後には、この印判を使用して領国支配の文書を発給している。それにひきかえこの間当主となっていたはずの氏輝の文書は 2 年間発行されていない。このことは、寿桂尼が単なる家督代行者ではなく、「女戦国大名」として実質的統治を行っていたとされる所以である。

氏輝が 24 歳で早世すると家督相続問題が持ち上がった。正室である寿桂尼が生んだのは長男氏輝と 5 男義元である。氏親の側室、福島左衛門の娘が生んだ子どもが玄広恵探である。寿桂尼は太原雪斎と謀り、花倉の乱で玄広恵探を自刃に追い込み、義元を 9 代今川当主の座につけた。その後は義元を雪斎が補助する形で今川氏は海道一の大名となり、安定した勢力を誇った。

永禄 3(1560)年 5 月 19 日、義元が桶狭間で織田信長に討たれると、後を継いだ氏真は政治的力量がほとんどなく、寿桂尼が前面に出ざるを得なかった。しかし今川氏は衰退の一途をたどった。武田晴信の駿河侵攻の脅威から守るため、寿桂尼は、駿河の鬼門に龍雲寺を開き自らそこに葬られた。永禄 11(1568)年 3 月 24 日没。年齢は 80 歳に近かったといわれる。

◎スライド 7

第 9 代今川家当主 今川義元木像(静岡市 臨濟寺所蔵)

治部大輔。父は今川氏親、母は中御門宣胤の女(寿桂尼)。永正 16(1519)年に生まれ、幼児より出家させられ、承芳と称し、駿河国善徳寺にいた。家督を相続した兄氏輝が天文 5(1536)年に早世すると、兄の玄広恵探と家督を争い、6 月 10 日これを倒して家督を相続した。

天文 6(1537)年義元は従来敵対関係にあった甲斐の武田氏と結び、武田信虎の娘をめとった。そのため同盟関係にあった北条氏との関係が悪化し、同年、

北条氏綱は駿東・富士二郡に侵入した。義元は関東の上杉憲政と提携して氏康を挟撃し、これを破り北条氏の勢力を伊豆国境線まで後退させた。

一方今川氏の主力が東部に向かっているうちに、尾張の織田氏の勢力が三河に進出し、松平氏を圧迫するようになった天文 16(1547)年、織田信秀は同国岡崎城を攻撃し、松平広忠は義元に救援を求め、子竹千代を人質に送ったが、途中織田信秀に奪われた。天文 18(1549)年広忠が死ぬと、義元は松平氏が織田氏に属することを恐れ、決戦にでて太原雪斎らの働きにより安城城を攻略し、城主織田信広を捕え、これと竹千代を交換した。この安城城攻略と人質の交換により、松平氏は完全に今川氏の保護下におかれることとなった。

織田信秀が死去すると、織田信長は天文 23(1554)年北条氏康と連携し、氏康を駿河東部に侵入させた。今川義元は、武田晴信の援軍を得て北条氏と戦ったが、戦いは膠着状態となり、太原雪斎の斡旋で三者の和議が成立した。これを善徳寺の会盟という。武田晴信の娘を北条氏康の子氏政に、氏康の娘を義元の子氏真に嫁せしめ、すでに義元の娘は晴信の子義信に嫁しているから、三者の政略結婚による同盟が成立した。

東部での戦線をこのような形で安定させた義元は、全力で西部まで勢力を伸ばした。永禄 3(1560)年 5 月義元は、駿河・遠江・三河の兵を動員して西上の途に就いた。沓掛に本営を進め、松平元康らをして織田方の防衛陣、丸根砦・鷲津砦を落し、同年 10 月 9 日みずから進んで桶狭間に本営を移したが、織田信長の奇襲にあって討死した。享年 42 歳。

◎スライド 8 (取扱注意資料です)

今川仮名目録表紙 明治大学博物館所蔵

*この資料は学習教材のみ使用が許可されています。画像のコピー・転用は絶対にしないでください。

1. 仮名目録制定の趣旨について

「今川仮名目録」は、戦国大名が制定した現存する最古の分国法・家法である。制定者は駿河国の守護から戦国大名への転換に成功し、駿河・遠江両国に新しい支配体制を確立しつつあった今川氏親である。

氏親は大永 6 年(1526)に全 33 カ条を制定し、ついで義元は天文 22 年(1553)に「仮名目録追加」21 カ条を、また同時期に「訴訟条目」13 カ条を制定している。義元・氏真が支配文書を発給する際に、印文「如律令」の印章を使用したこととあわせて考えると、今川氏の領国支配はいわゆる法治主義によっていた。

今回はその基礎となった氏親制定の 33 カ条について紹介する。

「仮名目録」が制定された大永 6 年(1526)4 月 14 日の約 2 ヶ月後の 6 月 23 日に氏親は死去している。このことから、氏親が自分の死後の領国の混乱を、基本法の制定によって防ごうとしたのが、「仮名目録」制定の直接的契機であったと思われる。

この法典の作成に関しては「自分が領国を支配してきた経験から、法典を定めておいた方が領国のために良いとおもわれるので密かに記しておいた」とあるように、作成者は氏親自身であった。

「甲州法度之次第」(信玄家宝)が高白齋こうはくさいによって作成され、武田信玄(晴信)の名で発布されたように、分国法は、奉行人などの法律専門家が作成するのが一般的である。しかし「仮名目録」は統治者である戦国大名自身が作成した分国法であった。

制定の目的については、「現代の人々は悪賢くなって思いもよらない紛争が起こり、その訴訟が今川氏の法廷に持ち込まれるので、あらかじめそれに対応して、公平な裁判を下すことができる裁判規範として、この法典を制定しておく。該当する訴訟が持ち込まれた時は、この法典の条項に基づいて判決を下せ」と記されているように、氏親は新時代への対応として裁判規範を作成したのである。

また氏親は、この法典の条文として採用することができなかつた「天下の法度」や今川氏がこれまでに発布した個別法令の効力を保障した。この「天下の法度」とは法のうち武家社会に受容され通法として定着した法、また広く社会的に定着した慣習法などの法である。氏親は新しい時代に即した法を作りだすとともに、「天下の法度」や今川氏がすでに発布した法令の中から重要と思われるものを選び、それらに恒久的なより強い効力を持たせることを目的に、法典形式の基本法を制定したのである。

2. 今川仮名目録の条文

以下は「仮名目録」の条文を共通する項目についてまとめたものである。

第 1 条～第 4 条	所務法 (土地に関する規定)
第 5 条・第 6 条	人身法 (下級家臣の取り戻し規定)
第 7 条	不法侵入者に対する成敗権
第 8 条～第 11 条	喧嘩に関する条文
第 12 条	友人誤殺免責条項
第 13 条～第 21 条	土地売買・貸借に関する条文
第 22 条・第 23 条	不入地に関する条文
第 24 条～第 33 条	関所撤廃、寄船法、寄木沙汰の法、婚姻制限などの国内法

仮名目録の中で特徴的な条文を3つのスライド教材とする。

◎ スライド9 (取扱注意資料です)

第1条 名田の没収禁止と年貢増を条件とする名田の競望

明治大学博物館所蔵資料

*この資料は学習教材のみ使用が許可されています。画像のコピー・転用は絶対にしないでください。

◎ スライド10

第1条 名田の没収の禁止、年貢増を条件とする名田の競望 (翻刻)

一

譜代の名田、地頭無意趣に取放事、停止之畢、但年貢等無沙汰においてハ、是非にをよぼざる也、兼又彼名田年貢をあいますべきよし、望人あらハ、本百姓に、のそミのこたくあいますべきかを尋る上、無其儀は、年貢ましに付而、可取放也、但地頭本名主をとりかへんため、新名主をかたらひ、あいますべきのよし、きよごんを構へハ、地頭に (をいてハ、かの所領を可没収、至新名主ハ、可処罪科也)

◎ スライド11

第1条 名田の没収の禁止、年貢増を条件とする名田の競望 (現代語訳)

一

譜代の家臣の所領である名田を地頭が正当な理由もなく没収することはすでに禁止してある。但し、年貢などが未納の場合はやむを得ざる場合として没収できる。かねてまた、その名田よりの年貢を (従来より) 増やして地頭に納めるから、その名田を占有したいと望む申し出人があるなら、現在の権利者の本百姓に対して地頭から、申し出人と同額の年貢増分を受け入れるかどうかを糺したうえ、本百姓が承知しないなら名田を没収して申し出人に与えることができる。但し、地頭が本名主を取り換えるために、新名主と共謀して、年貢増の虚言を構えるならば、地頭に対しては領地を没収し、共謀の新名主に対してはしかるべき罪科に処するものである。

(補足説明)

これは今川仮名目録の首条である。地頭と名主の関係において、名主が年貢を滞納しない限り、名主の名田所持権を認めている。その原則の上に立って、地頭は領内の名田の年貢増額の請負を訴えるものがあり、現にその名田を所持している名主が同量の年貢額の引上げを承諾しない場合、その名主との間の名

田請負契約を破棄し、年貢増額を請け負うことを訴えた新名主との間に契約を結ぶことが認められることを定めている。この条項にみられる特徴は、地頭と名主との関係は、名田を媒介にして年貢を請け負う契約関係であるという原則であり、名主の名田所持権を認めつつ、年貢請負の自由競争の上に地頭に有利な年貢増徴の契約を認めた点である。

◎スライド 12

第 8 条 喧嘩両成敗法(翻刻)

一

喧嘩に及輩、不論理非、両方共に可行死罪也、将又あひて取かくるといふとも、令堪忍、剩被疵にをいてハ、事ハ非儀たりといふとも、当座をんひんのはたらき、理運たるへき也、兼又与力の輩、そのしはいにをいて疵をかうふり、又は死するとも、不可及沙汰のよし、先年定了、次喧嘩人の成敗、当座その身一人所罪たる上、妻子家内等にかかるへからず、但しはいより落行跡においてハ、妻子其咎かかるへき歟、雖然死罪迄ハあるべからざるか

<http://www.meiji.ac.jp/museum/guidance/shinsei/imagawa.html>

(明治大学博物館 HP 翻刻文と資料写真あり)

◎スライド 13

第 8 条 喧嘩両成敗法 (現代語訳)

一

喧嘩におよぶ輩は理非を論ぜず双方とも死罪に処すべきである。はたまた、相手から喧嘩を仕掛けられても堪忍してこらえ、その結果疵を受けるに及んだ場合、喧嘩の原因を作ったことは非難すべきであるが、とりあえず穏便に振舞ったことは道理にしたがった幸運として罪を免ぜられるべきである。かねてまた、双方の与力(同心・寄騎・家臣・あるいは喧嘩の味方)の者が喧嘩の現場にいて疵を受けたあるいは死亡したとしても、加害者に対して訴訟をおこすことができないことは先年に定めておいたところである。

次に喧嘩人の成敗(死刑)はとりあえず本人1人のみにかかることで、妻子家族にかかわるべきものではない。但し、本人が喧嘩の現場から逃亡した後は妻子等に咎がかかることもあり得るであろう。しかしながら、その場合には死罪にまですべきではないだろう。

中世における喧嘩は、現在の喧嘩とは違って、刀などの武器を持って戦う私闘、さらには親類・縁者・友人など多くの加担者が双方に味方して戦う集団対集団の私戦であった。そして、喧嘩は中世武士の最も重要な行為規範とされた自力救済観念に基づく権利の行使であった。喧嘩は、自分の名誉を自分の力で

守る名誉のための闘争、自分の土地の権利を自分の力で守るための権利のための闘争として存在し、日常的に行われていた。この喧嘩は日本だけでなく、中世ヨーロッパをはじめとする世界の諸国家においても同じであった。

喧嘩をする権利である自力救済権を否定する治安立法の成立が、ヨーロッパでは近代国家成立の一つの目安となっている。自力救済観念に基づくあらゆる実力行使を否定し、すべての紛争＝喧嘩を今川氏の裁判に委ねることを強制したこの喧嘩両成敗法は、法制史の上でここに位置づけられる。

戦国大名は、分国法において、いずれもこの私闘・私戦の制限・禁止を定めている。『塵芥集』（第 38 条）、『結城氏新法度』（第 5 条）、『六角氏式目』（第 12 条）などは、両成敗ではあるが、室町幕府法の影響を受け、最初に攻撃をしかけた側に罪を重く、防戦側に罪を軽くする故戦防戦法を採用している。喧嘩をした当事者双方に同等の刑（死刑）を科す完全な形の両成敗法は、地域の平和を目的として結ばれた国人一揆の法などにはみられるが、国家法としては「仮名目録」に初めて登場した法である。そして、両成敗法は、『甲州法度之次第』（第 17 条）、『長宗我部氏掟書』（第 25 条）などに継承され、江戸時代以降、成文法とは異なる「天下の法度」という慣習法として社会に定着し、近代に至るまで、喧嘩処理方法に大きな影響を及ぼした。

◎スライド 14

第 30 条 他国との婚姻の禁止（翻刻）

一

駿・遠両国之輩、或わたくしとして他国よりよめを取、或ハむこに取、むすめをつかハす事、自今以後停止之畢、

第 30 条 他国との婚姻の禁止（現代語訳）

一

駿河、遠江の者は私事として他国より嫁を取り、あるいは婿に取り、また嫁に出すことは、今より以後は禁止する。

「今川仮名目録」で最も著名な条文であり、大学入試等でも頻出の史料である。駿河、遠江の今川支配の地域では、他国との縁組を禁止している。これは家臣が勝手に縁組をして、今川氏から離反しないようにという家臣団統制のひとつである。

◎スライド 15

研究の手引（参考資料）

- ・説明文は『静岡県史』通史編2 中世 678～689 頁
- ・『図説 静岡県史』静岡県史 別編3
- ・『今川時代とその文化 消えた 230 年を追う』 静岡県文化財団
- ・今川義忠木像 菊川市 正林寺
- ・今川氏親木像 静岡市 増善寺
- ・寿桂尼画像 菊川市 正林寺
- ・今川義元木像 静岡市 臨濟寺
- ・今川仮名目録表紙 明治大学博物館
- ・今川仮名目録第 1 条 明治大学博物館
- ・『資料に学ぶ静岡県の歴史』

<http://www.tosyokan.pref.shizuoka.jp/contents/history/ssr.html>